様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８１２００

研究課題名（和文）21世紀型学力の日米比較による感性・美的判断力を培う美的教育カリキュラム開発

研究課題名（英文）Curriculum Development of Aesthetic Education Cultivating Feelings and Aesthetic Judgment Based on a Comparative Study of the 21st century Skills and Competencies of the US and Japan

研究代表者
中村　和世（Nakamura, Kazuyo）

広島大学・教育学研究科（研究院）・准教授

研究者番号：２０３６３００４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：ユネスコの21世紀芸術教育政策や米国の視覚芸術教育の新しいナショナル・スタンダードの検討、イリノイ州及びインディアナ州での現地調査を踏まえて、図画工作・美術科で育成すべき21世紀型のスキル・能力を明確化し、小学校において鑑賞力の向上をねらいとした学習開発を行っている。学習開発では、児童の思考・判断・表現を要する対話型鑑賞と学習に対する自律性や責任を助長する形成的アセスメントを取り入れ、独自に開発した鑑賞力テストによってその効果を検証している。

研究成果の概要（英文）：This study defined skills and competencies to be developed in art and craft education in the 21st century. It examined the 21st arts education policy of the UNESCO and the New Art Education Standard of the United States, and made investigation about the current educational practice at schools and museums in Illinois and Indiana in the U.S.A. Based on the findings of the examination and the investigation, it conducted a collaborative action research in an elementary school in which a new type of teaching and learning that demand students to think, judge, and express actively in art appreciation was developed and accessed.

研究分野：図画工作・美術科

キーワード：視覚芸術教育スタンダード　美術鑑賞　ユネスコ　学習開発　アクション・リサーチ　アメリカ合衆国の教育

１．研究開始当初の背景

１．研究開始当初の背景

(1)学習指導要領の改訂に向けて、図画工作・美術科で育成すべき 21 世紀型学力の明確化が求められている。2012 年に行った米国の美術教育に関する現地調査からは、全米美術教育学会によるスタンダード改訂が 2010 年から着手されており、21 世紀型スキルに応じた教育実践が、学校教育及び美術館で取り組まれていることが明らかになっている。

(2)日米の図画工作・美術科の学習内容を比較すると、米国では、1980 年代に起こった美術教育改革運動である Discipline-Based Art Education の影響により、美術批評、美術史、美術理論の内容と方法に取り入れた鑑賞の学習開発が進んでいることが挙げられる。わが国の図画工作・美術科も Discipline-Based Art Education の影響により、平成元年版学習指導要領から鑑賞の充実が図られており、引き続き、鑑賞学習の研究を進めていくことが課題となっている。

２．研究の目的

(1)ユネスコの諮問学術団体である国際美術教育学会の動向や、21 世紀型スキルを取り入れた米国の視覚芸術教育の新スタンダードの学力観、目標、学習内容、評価の新しい点について検討し、現行学習指導要領の図画工作・美術科と比較する。

(2)現在の米国の学校教育では、実際にどのような美術教育が実践されているのかをイリノイ州とインディアナ州で現地調査する。

(3)21 世紀型学力観の検討を踏まえ、感性・美的判断力を培う美的教育の課題を明確にし、小学校において図画工作科の学習開発を行う。

３．研究の方法

(1) 「21 世紀のための創造的能力の形成」をテーマにリスボンで開催された第１回芸術教育世界会議の資料から、ユネスコが今日において推進する芸術教育の動向を検討する。米国の視覚芸術教育のスタンダード改訂に携わった全米美術教育学会・前会長であるパデュー大学のロバート・セイボル教授を日本に招聘して講演会を開き、21 世紀型に対応した美術教育について協議する。

(2)米国イリノイ州のシカゴ市にあるシカゴ大学実験学校、フランシス・W・パーカー・スクール、シカゴ美術館、インディアナ大学などを訪問し、どのような美術教育の実践が行われているのか、現地調査する。

(3)広島県公立小学校において、協働型アクション・リサーチを行い、感性・美的判断力を培う図画工作科の学習開発を行い、その効果を検証する。

４．研究成果

(1)ユネスコと国際美術教育学会などの連携により開催された第１回芸術教育世界大会報告書には、21 世紀の芸術教育の方針として、以下が示されている。①世界人権宣言に従って、完全かつ調和の取れた発達と文化的で芸術的な生活に参加することを保障する教育と機会の権利を守ること、②21 世紀に必要な創造性、柔軟性、適応能力、革新性などを個人に身につけさせること、③所属する地域社会で首尾よく機能できるように、教育の質を改善すること、④個人と集団のアイデンティティと価値を高め、文化的多様性の確保と促進に貢献する芸術教育を推進すること。

米国の視覚芸術教育の新しいナショナル・スタンダードは 2014 年春に公表され、その骨子は以下のようにまとめられる。

学力観―児童・生徒の経験と結びついた深い理解と学習の転移能力を高めることに主眼が置かれる。学習の転移とは「ある状況において学んだことを新しい状況に拡張する能力」と定義され、今日のアメリカの学校が目指すべき最終的な教育目標として挙げられている。「知るべきこと」や「できなければならないこと」の習得に終わるのではなく、美術に対する考え方の枠組みを児童・生徒が自ら創り出し、教科の内容を深く理解することを通して、生涯にわたって学び続けることのできる自立した学習者の育成がねらいとされている。

目標―知識、技能、理解、転移から構成される「芸術的リテラシー」を備えた市民の形成が目指されている。学校教育における美術教育の根拠には、「コミュニケーションとしての芸術」、「創造的な自己実現としての芸術」、「文化、歴史、コネクターとしての芸術」、「幸福の手段としての芸術」、「共同体への参加としての芸術」の 5 項目が示されている。

学習内容―児童・生徒の視覚芸術にかかわる行為と、制作、美術史、美術批評、美学の専門家の行為とをつなぐ「創造する」、「発表する」、「応答する」、「結び付ける」の4プロセスを大枠にして学習内容が構成されている。また、21 世紀型スキルである、「学習と革新に関するスキル」、「情報・メディア・ICT に関するリテラシーのスキル」、「生活とキャリアに関するスキル」を大枠に、「批判的思考・問題解決」、「コミュニケーション」、「創造性」、「革新性」、「情報リテラシー」、「メディアリテラシー」、「ICT リテラシー」、「柔軟性・適応能力」、「自発性・自律性」、「社会的・異文化間スキル」、「生産性・説明責任」、「リーダーシップ・責任」が学習内容に取り入れられている。

学習者―学習指導の中心には児童・生徒の芸術経験が据えられ、個人の経験を学習内容

に結び付けることや、学校の教科枠を超えて、児童・生徒が自らの視点で社会、文化、歴史の側面から総合的に視覚芸術を理解することが求められている。

評価―到達度の診断や学習指導の改善と合わせて、児童・生徒の学習に対する自律性と責任を助長するためにルーブリックを用いた形成的アセスメントを行うことが想定されている。

今後、わが国の図画工作・美術科において重点的に開発を進めていくべき内容として2点が挙げられる。1 点目は、「核心的で重要な概念やプロセス」を軸にして児童・生徒の経験を再構成する学習をデザインする構成主義の立場から、幼稚園から高等学校までの指導内容の編成原理を明確化していくことである。2 点目は、高次の思考力・判断力・表現力の発達を真正に評価することをねらいとしたアセスメントを開発していくことである。

(2) 平成27年１月27日・28日に行ったシカゴ大学実験学校における現地調査、及び、Eメールによる教員へのインタビュー調査から、①実験学校では、イリノイ州教育委員会が定めるスタンダードはあくまで参考として扱われ、学校独自の教育方針のもと、専門性を備えた個々の教員の創造性に委ねられたカリキュラム開発が行われていること、②美術科カリキュラムに関しては、児童・生徒の生活、学校、社会の３者間の結びつきが重視され、博物館・美術館等との連携による学習の比重が高いこと、③造形要素やデザイン原理などの美的リテラシーの習熟が目指され、文字言語による文学の創作と同様、美術は形や色などの視覚言語による創作であるという考え方のもとで学習指導が行われていることなどが明らかになった。

平成27年１月30日及び9月28日に行ったシカゴ市フランシス・W・パーカー・スクールにおける現地調査、及び、Eメールによる教員へのインタビュー調査から、①学習指導の方針として、探究型や問題解決型の学習が重視されていること、②総合的・教科横断的な編成による統合カリキュラムが採用されていること、③児童・生徒の学習に対する自律性と責任を助長することをねらいとした構成主義の立場から学習指導が行われていること、④自制力、精神的自立、協力的精神を発達させるために、インターアクティブで協力的なグループ活動が重視されていることなどが明らかになった。米国の新しいナショナル・スタンダードで示される21世紀型の学力観にみられるように、教室で学んだことを新しい状況における問題解決のために活用でき、それを通して自己の感情・思考・行動の枠組みを再構成できる創造的な資質や能力の育成が図られている。

平成27年2月28日及び3月21日に行ったシカゴ美術館における現地調査では、21世紀に対応した学校と美術館との連携プロジェクトであるＴＥＡＭ（Thinking Experiences in the Art Museum）に焦点を当て、インタビュー調査を行っている。ＴＥＡＭは、批判的思考や創造的思考のスキル、及び、視覚的リテラシーの育成をねらいとしており、シカゴ市にある公立学校24校がパートナーとして参加している。ＴＥＡＭプロジェクトが推進する学習では、美術作品を「観察する」をベースに「調べる」、「結び付ける」、「生み出す」のスキルを活用する学習が行われ、それらのスキルを、国語、社会、算数、理科を含む他教科等や学習者自身の経験に転移・統合させる力を育むことがねらいとされている。また、個々の学習者が、学習で生じた自らの思考プロセスを振り返ることを通してメタ認知の力を高めることが重視されている。

平成27年9月23日・24日にインディアナ大学東アジア研究所を訪問して大学教員3人を対象に行った調査からは、インディアナ州では、1994年版のスタンダードを反映した州スタンダードに従った教育実践が行われていること、グローバル化に対応するために、多様な文化の芸術を対象とした学習の開発がインディアナ州で進められており継続課題となっていることなどが明らかになった。

(3) 平成26年・27年度に、広島県公立Ｓ小学校（教員数：20名、児童数：350名）の協力により、協働型アクション・リサーチを通して、美的リテラシーを備えた鑑賞力の向上をねらいとする学習開発を実施した。学習開発では、①地域の美術館などの利用や連携を進め、思考・判断・表現を要する対話型鑑賞の取り組みを充実させること、②ポートフォリオを用いた形成的アセスメントの取り組みを図ることを研究課題とした。

鑑賞力の向上を測定するために、平成26年6月に全児童を対象に実態調査を行い、感性の働きと視覚的リテラシーから構成される鑑賞力のレベルは表１のように段階に分けられることを示した。

この鑑賞力レベル指標を用いて、平成27年度には、上記の①②を課題とした学習開発の効果を、鑑賞力向上を測るプレテスト（平成27年6月に実施）・ポストテスト（平成27年12月に実施）によって検証した。結果として、表２の「事前・事後テストにおける鑑賞力レベルの平均値比較」に示されるように、6年生の視覚的リテラシーを除いては、すべての学年において感性と視覚的リテラシーのレベル平均値が上昇しており、学習の効果が確認された。

(4) 今後の課題として、学習の転移を主眼とする21世紀型の学習をさらに開発していくために、①米国の視覚芸術教育の新スタンダードに示された学習内容の構成の検討を踏まえて、図画工作・美術科で学ばれるべき「核心的で重要な概念やプロセス」を明確化し系統立てていくこと、②「核心的で重要な概念や

プロセス」を取り入れた学習をさらに開発していくことが挙げられる。

表１　絵画の鑑賞力レベル指標

視覚的リテラシーレベル ＼ 感性レベル	①描かれているものの特徴を捉えている	②描かれているものの特徴、及び、形や色などの特徴を捉えている	③描かれているものの特徴、形や色などの特徴、構成の特徴を捉えている
1おおまかな印象を主観的に感じ取っている	１－①	１－②	１－③
２　主観的な感じ方によって、想像を広げている	２－①	２-②	２－③
３　作品に見出される感情表現を認識しながら、想像を広げている	３－①	３-②	３－③
４　作品に表された主題に対して洞察している	４－①	４-②	４－③
５　美術の伝統との関連性を踏まえながら、作品に表された主題に対して洞察し、自己や社会に対する考えを深めている	５－①	５-②	５－③

表２　事前・事後テストにおける鑑賞力レベルの平均値比較

学年	事前・事後	感性	視覚的リテラシー
特別支援	事前	1.25	1.13
	事後	**1.75↑**	**1.75↑**
1年	事前	1.02	1.10
	事後	**1.95↑**	**1.82↑**
2年	事前	1.33	1.13
	事後	**1.80↑**	**1.68↑**
3年	事前	1.34	1.54
	事後	**2.13↑**	**1.92↑**
4年	事前	1.62	1.42
	事後	**1.89↑**	**1.52↑**
5年	事前	2.17	1.72
	事後	**2.47↑**	**1.85↑**
6年	事前	2.80	1.81
	事後	**2.86↑**	**1.74↓**

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 中村和世、アメリカ美術教育の現在（３）―フランシス・W・パーカー・スクールの例、教育美術、査読無、No.885、2016、pp.56-60

② 中村和世、アメリカ美術教育の現在（２）―シカゴ美術館の例、教育美術、査読無、No.883、2016、pp.50-53

③ 中村和世、アメリカ美術教育の現在（１）―シカゴ大学実験学校の例、教育美術、査読無、No.880、2015、pp.52-55

④ 中村和世、米国における視覚芸術教育の新しいナショナル・スタンダードの検討、美術教育学研究、査読有、47 巻、2015、pp.223-230

⑤ 中村和世、これからの造形科教育で身につけさせたい資質や能力―ユネスコ及び米国の動向を踏まえて―、学校教育、査読無、No.1164、2014、pp.14-21

⑥ 中村和世、造形科の指導内容と方法―新しい全米視覚芸術スタンダードの検討―、学校教育、査読無、No.1155、2013、pp.12-17

〔学会発表〕（計３件）

① 中村和世、子どもの感性を育てる鑑賞の学習指導・評価に関する開発研究―尾道市立瀬戸田小学校との協働型アクション・リサーチを通して、第 54 回大学美術教育学会横浜大会、2015 年 9 月 20 日、横浜国立大学

② Kazuyo Nakamura, Lesson Study: Developing Creativity in Children through Art, NAEA National Convention in New Orleans,2015.3.26, New Orleans (USA)

③ 中村和世、米国における視覚芸術教育の新しいナショナル・スタンダードの検討、第 53 回大学美術教育学会福井大会、2014 年 10 月 5 日、福井大学

６．研究組織

(1)研究代表者

中村　和世（NAKAMURA, Kazuyo）
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：２０３６３００４